

# 慈明院寺報九月号

## 桃栗三年、柿八年

今年も境内の栗や柿が実をつけた。境内の栗や柿の木は、祖父・慈水和尚が好んで植えたものである。「孫の代には実がなるようになる。」と生前によく言っていたそうだ。「桃栗三年、柿八年」とよく言われるが、栗や柿を植えた祖父は木々の実をお寺の成長に重ねて、今に残してくれたのではないかと思う。

江戸時代に天海といいうお坊さんがいた。彼はとても長命で百八才まで生きたと云われている。その天海が将軍・徳川家光に、お城で柿をご馳走になつた。柿を食べ終わつた天海は、その種を持ち帰ろうとする。不審に思つた家光が聞くと天海は種を庭に植えるのだとつた。この時、天海は百才に近かつた。「氣の長い話だな。」と家光は笑う。天海は「何事も性急に考えてはいけません。」と家光を諭した。それから何年か経つて、天海は家光にその種から育てた柿を献上したと伝えられている。

また、武者小路実篤といいう小説家・詩人の著書「武者小路実篤詩集」には

『桃栗三年柿八年、達磨は九年で俺は一生』と表現されている。後半の詩

「達磨は九年で俺は一生」は実篤の創作である。達磨大師が、中国の嵩山の少林寺で壁に向かって座禅を組み、九年かけて悟りを開いた故事が由来となり「面壁九年」という言葉ができた。作家の実篤はそれに続けて「俺は一生」と表現し、自分自身が実るには一生かかり、生涯修行と文字に残したのである。

お盆まいりをしていると、九十才や百才という長寿の方も決して少なくない。きっと日本人の平均寿命は伸びていくだろう。人生の実りが柿や栗に負けないほど、甘く充実して実ります様に。気は長く、心は丸く、腹立てず、口慎めば命長かれ。

住職 合掌

令和三年七月二十一日（お施餓鬼）燈籠供養を勤めました。今年は五人の僧侶にご助法頂き、無事に法会を行いました。燈籠供養をお申し込み頂いた皆様、あるいはお盆まいりでお世話になつた皆様に厚く御礼を申し上げます。



秋季彼岸・塔婆供養法会のご案内（別紙参照）

来る令和三年九月二十三日（木曜日）秋分の日

午前十一時より

どなたでも塔婆のお申し込み、当日のご参拝は出来ます。案内状をご参照頂き、宜しければお参り下さいませ。（昼食、お菓子お接待致します）



慈明院（〒八一ー一三一 福岡市早良区大字西二三四一ー二〇）  
TEL（〇九二）八〇四一四五七〇 FAX（〇九二）八〇四一四六〇五

住職・吉住大慈 携帯電話〇九〇一（五二八一）一七四九四